

三祖大師信心銘 一

至道無難 唯嫌揀擇

(至道無難、唯嫌揀擇、)

但莫憎愛 洞然明白

(但憎愛莫^{ただぞうあいな}ければ、洞然^{とうねん}として明白^{めいはく}なり。)

毫釐有差 天地懸隔

(毫釐^{ごうり}も差^さ有^あれば、天地^{てんち}懸^{はる}に隔^{へだ}たる、)

欲得現前 莫存順逆

(現前^{げんぜん}を得^えんと欲^{ほつ}せば、順逆^{じゆんぎやく}を存^{ぞん}すること莫^{なか}れ。)

道に至るに難しいことはない、ただえり好みすることを嫌うのである。憎むとか愛するとかがなければ、この世はほんとうに明白この上ない。しかしそこに毛筋ほどの差でもあれば、天地のようにはるかに隔っているのだ。眼の前のことを得たいと思うのなら順序などを考えてはならない。

揀擇 ものをえり好みすること。

毫釐 毫も釐も細い毛。

三祖大師信心銘 二

違順相爭 是爲心病

いじゅんあいあらそ (違順相爭う、これ しんびよう 是を心病と爲す、)

不識玄旨 徒勞念靜

げんし (玄旨を識らざれば、ただ ねんじょう 徒に念靜に勞す。)

圓同大虚 無欠無餘

まじか (圓なること大虚に同じ、たいきよ おな 欠ること無く餘ること無し。)

良由取捨 所以不如

まこと しゅしや (良に取捨に由る、よ ちえ 所以に不如なり。)

違っているとか合っているとかを争うのは心の病と言うしかない。本来のことを知らなければただ静かにすわっているにすぎない。本来のことというのは丸い円のようなもので大きなこの世界と同じにどこにも欠けているところはないし余っているところもない。欠けているとか余っているとかというのはわれわれが必要としたり要らなくなったりするからなのだ。だから本来のことというのは「こういうものである」としてはならないのである。

大虚 大いなる虚空、宇宙

不如 如でない、「かくの如く」ではない

三祖大師信心銘 三

莫逐有緣 勿住空忍

(有緣うえんを逐おうこと莫なかれ、空忍くうにんに住じゅうすること勿なかれ、)

一種平懷 泯然自盡

(一種びようかい平懷ひようかいなれば、泯然みんぜんとして自おのずから盡つく。)

止動歸止 止更彌動

(動どうを止やめて止しに歸きすれば、止し更さらに彌いよいよ動どうず、)

唯滯兩邊 寧知一種

(唯ただり滯ようへんに滯とどらば、寧むしろ一し種しを知らんや。)

原因とか結果を追求しても仕方がない、世の中は空虚だとか認めてもいけない。本来のことはふだんのことそのものだから、原因とか結果とか空虚とかいうことも自然にその中に尽きていく。動をやめて静につこうとしても、静がますます動じてしまう。動だとか静だとかにこだわってはどうして本来のことを知ることができようか。

一種 一味。本来のこと

平懷 ふだんのこと

泯然 尽きてなくなる様子

三祖大師信心銘 四

一種不通 兩處失功

(一種通つうぜざれば、兩處りょうしよに功こうを失しつす、)

遣有沒有 隨空背空

(有うを遣やれば有ぼつに没くうし、空したに隨えば空そむに背くく。)

多言多慮 轉不相應

(多言たごん多慮たりよ、轉うたた相應そうおうせず、)

絶言絶慮 無處不通

(絶言ぜつごん絶慮ぜつりよ、處ところとして通とぜずと無なし。)

本当のことに通じていなければ、有だとか無だとか言う中に本当のことを見失ってしまう。有を捨てようとすれば有に埋没してしまうし、空にしたがおうとすれば空に背いてしまう。言葉で語りつくそうとしても考えつくそうとしても本当のことには相応しない、しかし言葉を離れ考えから離れたからといって本当のことに通じないということはない。

三祖大師信心銘 五

歸根得旨 隨照失宗

(根こんに歸きすれば旨しを得え、照しょうに隨したがえば宗しゅうを失しつす、)

須臾返照 勝却前空

(須臾しゅゆも返照へんしょうすれば、前空ぜんくうに勝却しょうぎやくす。)

前空轉變 皆由妄見

(前空ぜんべんの轉變てんべんは、皆妄見みなもうけんに由よる、)

不用求真 唯須息見

(眞しんを求もとむることを用もちいざれ、唯須ただすべからく見けんを息やむべし。)

本来の姿に帰すれば本当のことを得るが、見たこと聞いたことに従ってしまつては大事なことを失つてしまう。少しでも外に向かつて求める心を内に向けてみれば、以前に無だとか空だとか言つていたことには勝る。無だとか空だとかの見解がいろいろにかわるのはみだりに見解を付けるからである。眞を求めてはならない、ただ見解ということをやめてみるべきである。

三祖大師信心銘 六

二見不住 慎勿追尋

(二見にけんに住じゅうせず、慎つつしんで追尋ついじんすること勿なかれ。)

纒有是非 紛然失心

(纒わずかに是非ぜひあ有れば、紛然ふんぜんとして心しんを失しつす。)

二由一有 一亦莫守

(二には一いつに由よつて有あり、一いつも亦またまも守なかること莫なれ、)

一心不生 萬法無咎

(一心いつしん生しやうぜざれば、萬法ばんぽうに咎とが無なし、)

無咎無法 不生不心

(咎とが無なければ法ほう無なし、生しやうぜざれば心しんならず。)

善悪などの見解にとどまることなく、また決して追求してはならない。すこしでも善悪の見解があれば、紛糾して本来のことを見失ってしまう。善悪とか有無とかはもともと一つのことであるし、もともと一つだということも一つといることがあるわけではない。見解を起こさなければ、すべてのことにもともと間違いはない。もともと間違いなどないのだからそこには佛法もないし、見解がなければ本来のこともあるわけではない。

三祖大師信心銘 七

能隨境滅 境逐能沈

(能は境に隨て滅し、境は能を逐うて沈す、)

境由能境 能由境能

(境は能に由て境たり、能は境に由て能たり。)

欲知兩斷 元是一空

(兩段を知らんと欲せば、元是れ一空、)

一空同兩 齊含萬象

(一空兩に同じく、齊しく萬象を含む。)

不見精粗 寧有偏黨

(精粗を見ず、寧ぞ偏黨有らんや。)

中身は表面によつて見えなくなり、表面は中身の中に埋没する。表面は中身が有つてこそその表面であり、中身は表面が有つてこその中身である。中身とか表面とか二つのことを知ろうとするなら、もともとそれが一つの何でもないのであることを知るべきである。一つの何でもないものといつても二つのときと同じに森羅万象を含んでいるのだ。本当のことを言っているのにそれが詳しいとか粗雑だとかいうことがあるものか、どこにそんなかたよりがあると云うのだ。

三祖大師信心銘 八

大道體寬 無難無易

(大道體寬にして、難無く易無し、)

小見狐疑 轉急轉遲

(小見は狐疑す、轉た急なれば轉た遅し。)

執之失度 必入邪路

(之を執すれば度を失して、必ず邪路に入る、)

放之自然 體無去住

(之を放てば自然なり、體に去住無し。)

大道はもともとゆつたりとしたものだ。難しいことはなく易しいということでもない。狭い了見の者はそれを狐のように疑うからいつそう事を急いでいつそう遅々としてしまうのだ。

大道に執着すれば度が過ぎて間違つた道に入ってしまう。大道を手放してみれば大道はおのずからそこにあるのだ。そこから去るといふものでもないし、そこにとどまるといふものでもない。

三祖大師信心銘 九

任性合道、逍遙絕惱、

(性に任ずれば道に合う、逍遙として惱を絶す、)

繫念乖眞、昏沈不好、

(繫念は眞に乖く、昏沈は不好なり、)

不好勞神、何用疎親。

(不好なれば神を勞す、何ぞ疎親することを用いん。)

欲趣一乘、勿惡六塵、

(一乘に趣かんと欲せば、六塵を惡むこと勿れ、)

六塵不惡、還同正覺。

(六塵惡まざれば、還て正覺に同じ。)

本来のことに任せてみれば道にかなうものである。逍遙としていれば悩みなんでもともと無いのだ。心配事をしていると本来のことに背いてしまう。だからといってただ静かに坐しているだけではだめだ。好ましくないから精神が疲労してしまう。どうして本来のことから疎だとか密だとか決めつけてしまうのか。本来のこととひとつになろうと思えば、世俗のことを忌み嫌うことはない。世俗のことも忌み嫌わなければ、そこがかえって悟りの境地なのだ。

三祖大師信心銘 十

智者無爲、愚人自縛、

ちしや むい ぐにん じばく
(智者は無爲なり、愚人は自縛す、)

法無異法、妄自愛著。

ほう いほうな みだ みず あいじゃく
(法に異法無し、妄りに自から愛著す。)

將心用心、豈非大錯、

しん もつ しんもち あ だいしゃく あら
(心を將て心を用う、豈に大錯に非ざらんや、)

迷生寂亂、悟無好惡。

まよ じゃくらん しょう さと こうおな
(迷えば寂亂を生じ、悟れば好惡無し。)

智慧ある者に為すべきことなどないが、愚かな人は為すべきことに縛られてしまう。間違つた法などどこにも無いのだが、法を愛してそれに縛られてしまうのだ。心でもって心をどうにかしようとする、大きな間違いに違いない。法に迷つてしまふと心に空虚が生じ、悟つてみれば法が良いとか悪いとか言うことも無い。

三祖大師信心銘 十一

一切二邊、妄自斟酌、

(一切の二邊、妄りに自から斟酌す、)

夢幻空華、何勞把捉。

(夢幻空華、何ぞ把捉に勞せん。)

得失是非、一時放却、

(得失是非、一時に放却せよ、)

眼若不睡、諸夢自除。

(眼若し睡らざれば、諸夢自から除く。)

すべてのことに(善悪とかの)二極をたてて、自分勝手に考えてしまう。(そのような二極は)夢まぼろし、ありもしない花であつて、苦勞して捉まえてどうしようというのか。得失も是非もいっぺんに放り出してしまえ。眼が眠っていなければ、すべての夢は自然に消えてゆく。

三祖大師信心銘 十二

心若不異、萬法一如、

(心しん若もし異いならざれば、萬法ばんぼう一如いちによなり、)

一如體玄、兀爾忘緣。

(一如いちによ體たい玄げんなり、兀爾ごつじとして緣えんを忘ぼうず。)

萬法齊觀、歸復自然、

(萬法ばんぼう齊ひとしく觀かんずれば、歸復きぶくじ自然ねんなり、)

泯其所以、不可方比。

(其その所以ゆえんを泯みんぜば、方比ほうひすべからず。)

心に異をたてなければ、すべてのことはひとつである。ひとつの姿はまさに悟りの境涯で、何ごとからも屹立していて因縁などはとつくになくなってしまっている。すべてのことはもともとひとつなのだから、おのずから本当の姿に帰っていくのである。その理屈などは忘れ、なにもものも比較などしてはならない。

兀爾 孤立して動かない様子。

泯 ほろびる。なくなる。

三祖大師信心銘 十三

止動無動、動止無止、

(動を止むるに動無く、止を動ずるに止無し、)

兩既不成、一何有爾。

(兩既に成らず、一何ぞ爾ること有らん。)

究竟窮極、不存軌則、

(究竟窮極、軌則を存せず、)

契心平等、所作俱息。

(契心平等なれば、所作俱に息む。)

動を止めようとしても動などは無く、止を動かそうとしても止はないのだ。
(動だとか止だとかの) 両極はもともと成り立たつものではないし、それでは一つかというの一つということも余計なことだ。極め尽くしてみればそこに至る筋道などはあり得ないし、本当のことはすべてのものに備わっているのだから、為すべきこともそこに消えていく。

契心 本心にかなうこと。真義にかなうこと。

平等 不同なく一様であること。一切にあまねきこと。

所作 作す所。

三祖大師信心銘 十四

狐疑淨盡、正信調直、

(狐疑淨盡して、正信調直なり、)

一切不留、無可記憶。

(一切留らず、記憶すべきこと無し。)

虛明自照、不勞心力、

(虛明自照、心力を勞せざれ、)

非思量處、識情難測。

(非思量の處、識情測り難し。)

狐のような疑いはきれいになくなって、本当の信が調ってくる。すべてのこととはとどまることはないし、心に留め置くべきこともない。本当のことはそれ自体で明らかなのだから、私たちがどうこう考えることもない。「非思量」ということは、私たちの知識や感情では測りがたいのである。

虚明 本当のことは現れた事実ではないが(虚)、だからといって不明ということではない。

非思量 この不思量底を思量せよ。不思量底、如何が思量せん。非思量これ坐禪の要術なり。(普勸坐禪儀)

三祖大師信心銘 十五

眞如法界、無他無自、

(眞如法界、他無く自無し、)

要急相應、唯言不二。

(急に相應せんと要せば、唯不二と言う。)

不二皆同、無不包容、

(不二なれば皆同じ、包容せずということ無し、)

十方智者、皆入此宗。

(十方の智者、皆此宗に入る。)

本來の世界に、自他はない。とりあえずふさわしい言葉を探すなら、ただ二つではないと言うだろう。二つではないのだからだれかれと区別なく、すべてのものがそこに含まれるのだ。この世の智者は、みなこの宗に入る。

宗 禅門の意。根本の真理。

三祖大師信心銘 十六

宗非促延、一念萬年、

しゅう そくえん あら いちねんばんねん
(宗は促延に非ず、一念萬年、)

無在不在、十方目前。

むざい ふざい な じつぽうもくぜん
(在と不在と無く、十方目前。)

極小同大、忘絶境界、

ごくしょう だい おな きょうがい もうぜつ
(極小は大に同じく、境界を忘絶す、)

極大同小、不見邊表。

ごくだい しょう おな へんびょう み
(極大は小に同じく、邊表を見ず。)

ほんとうのことは時間の長い短いではなく、たったいまの様子は永遠にも通じている。在るとか無いとか言う以前にこの世界は目の前だ。小さいとか大きいとか言っても境目などはとつくになくなってしまっている。大きくたって小さいものと同じように誰もすがたを見たことがない。

促延 促は時間を縮めること。延は時間を延ばすこと。時間の長短。
辺表 周辺と表面。

三祖大師信心銘 十七

有即是無、無即是有、

(有即ち是れ無、無即ち是れ有、)

若不如是、必不須守。

(若し是くの如くならずんば、必ず守ることを須いざれ。)

一即一切、一切即一、

(一即一切、一切即一、)

但能如是、何慮不畢。

(但能く是くの如くならば、何ぞ不畢を慮ばからん。)

信心不二、不二信心、

(信心不二、不二信心、)

言語道斷、非去來今。

(言語道斷、去來今に非ず。)

有ということとはもともと無いし、無ということは無が有るではないか。もしこのことがわからなければ(有だとか無だとかに)固執してはならない。一つということがすべてで、すべてのことは一つなのである。そのようであれば、人間が未熟であるなどということを心配する必要もない。本来の自分自身もそれを信じることももともと一つのことなのだ。一つのこと信心一体のいまな

のである。そこは言葉の及ぶところではないし、過去だとか現在だとか未来だとかの問題でもない。

不畢

畢は終わること。終わりが無い。決着がつかない。

信心

信は信じる、任すということ。心は本来の自己。それらが二つのものではない。

言語道断

言葉で表現する方法が絶えること。

去来今

過去、現在、未来。